史跡難波宮跡発掘調査（NW02-8 次）現場公開資料

平成１４年１１月３日（日）
大阪市教育委員会
財団法人　大阪市文化財協会

はじめに

難波宮跡公園を中心とする一帯では、1954年から始まった発掘調査によって、大きく分けて２時期の宮殿跡（前期・後期）が見つかっています。前期難波宮は建物が掘立柱で瓦を葺かず、全面に火災の跡があり、天武天皇の朱鳥元年（686）に火事があった難波宮と考えられています。後期難波宮は、聖武天皇の時代に一時（744）首都ともなった難波宮で、礎石建ちの柱で瓦を葺いた建物があったと考えられています。この前後２時期の宮殿跡がほぼ同じ場所に建てられていたことが、難波宮の大きな特徴といえます。

今回の調査は公園の北東隅部分で行っています。ここは前期難波宮の八角殿やそれを取り囲む回廊、後期難波宮の東外郭築地が存在すると推定される場所です。1987年度の調査（NW87-54次）、及び昨年の調査（NW01-5次）によって、東八角殿院の詳細は明らかにされつつあります。今回の調査ではこれまで未調査であった部分を明らかにし、この地域の建物の正確な位置や規模についての知見を得ることを目的としています。

調査成果

１．前期難波宮東八角殿　西・北辺

八角殿は他の古代宮都には見られない難波宮における特徴的な建物で、法隆寺夢殿のような平面形が八角形の大規模な掘立柱建物です。今回の調査では、これまで見つかっていた柱穴も含めて22基の柱穴を見つけました。見つかった柱穴には火災のあとが見られます。柱穴は大きいもので掘形が一辺約1.2m、柱の直径は約0.4mです。他の宮殿建物の掘形がほぼ東西南北に沿う形で掘られるのに対し、八角殿の掘形は、建物の中心から放射状に掘られているところに特徴があります。今回の調査によって、東八角殿の全体像が明らかになりました。

２．前期難波宮東八角殿院回廊　北東隅部

八角殿院回廊は、八角殿のまわりを取り囲む複廊形式の掘立柱建物です。これまで、南辺・西辺・東辺の一部が明らかにされ、正確な規模がわかりつつあります。今回はその北東隅部分を明らかにしました。見つかった柱穴は4基で、柱穴の大きさは一辺約1.1m、柱の直径は約0.3mです。隅の部分であるため、柱間はすべて８尺（約2.4m、1尺=29.2㎝、なお通常は桁行10尺・梁行８尺）となっています。また回廊外側の柱穴では小柱穴が見つかりました。

３．後期難波宮東外郭築地

後期難波宮の外郭築地は、内裏・朝堂部分と外部とを区画するためのもので、瓦葺きの築地塀と考えられています。現在調査中で、現段階では築地の痕跡は見つかっていませんが、付近からは難波宮の瓦が多く見つかっています。

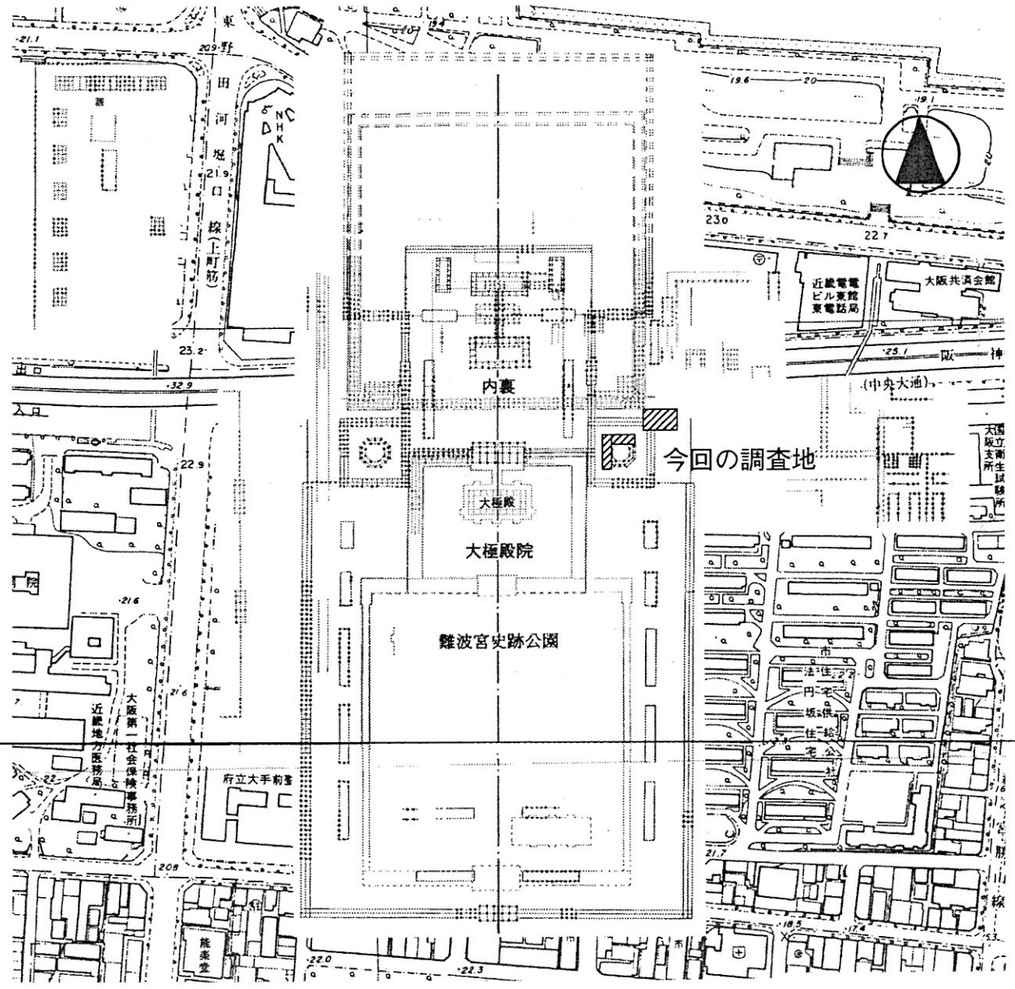

図１　調査地位置図

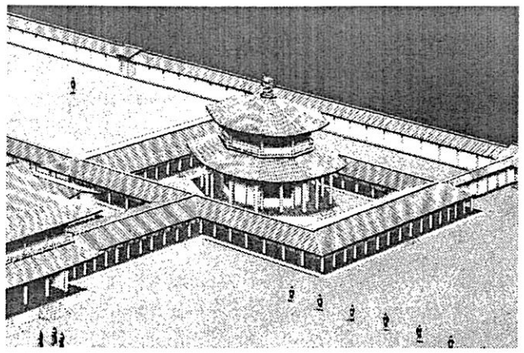

図３　前期難波宮東八角殿院復元想像図

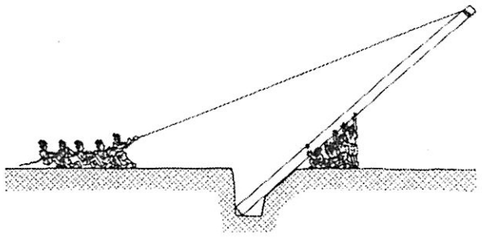

図４　八角殿掘立柱の建てかた模式図

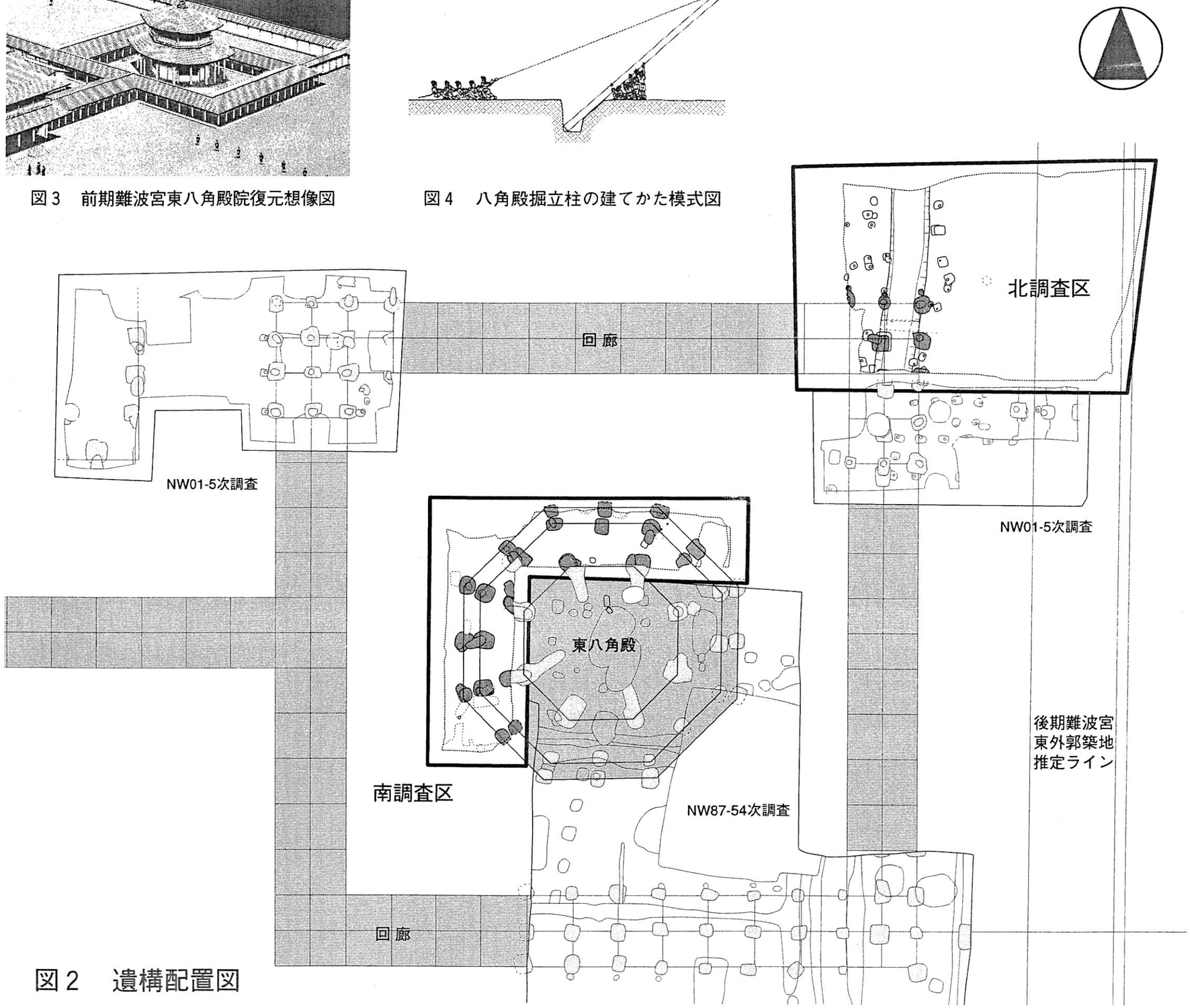

図２　遺構配置図

難波宮関係略年表

応神		5世紀	（遺構）	難波に行幸（大隅宮）
仁徳				難波に都す（高津宮）
欽明				難波に行幸（祝津宮）
				（このころ仏教伝来）
推古			遺難波宮跡建物下跡層	外国使臣を難波に饗する（四天王寺・法隆寺建立）
	608	推古16		遣隋使難波より出発
孝徳	645	大化元	前期難波宮	（大化改新）都を難波に移す
	652	白雉 3		難波長柄豊碕宮完成
天智	667	天智 6		（大津宮遷都）
弘文	672	弘文元		（壬申の乱）
天武	673	天武元		（飛鳥浄御原宮遷都）
	678	6		摂津職の初見
	679	7		難波に羅城を築く
	684	12		難波に都せんと詔す
	686	朱鳥元		大蔵省より出火、宮室全焼
持統	694	持統 8		（藤原京遷都）
文武	699	文武 3		難波宮に行幸
	706	慶雲 3		難波に行幸
元明	710	和銅 3		（平城京遷都）
元正	717	養老元		難波宮に幸す
聖武	726	神亀 3	後期難波宮	藤原宇合を知造難波宮事とす
	732	天平 4		宇合らに物を賜う《工事一段落か》
	734	6		難波京の宅地を班給す
	744	16		難波宮を皇都と定む
	745	17		（平城京遷都）
孝謙	756	天平勝宝 8		天皇、難波宮の東南新宮に御す
光仁	771	宝亀 2		難波宮に行幸
桓武	784	延暦 3		（長岡京遷都）
	793	12		この頃難波宮廃止か
	794	13		（平安京遷都）